

1998年10月4日(日)午後、分科会L『王様の政治学—デモクラシーにおける王室』
「タイ」 報告者 村嶋英治(早稲田大学アジア太平洋研究センター)

①国王とNation

タイにおいては、Nation(チャート)の名を用いることなしに、国王権力に正統性を与えることは、20世紀に入ると困難となった。1932年の立憲革命まで王族による専制政治の時代であるが、その時代にあってもワチラーウット王(ラーマ6世、在位1910-25)が体系化した官製国家イデオロギーは、仏教的王権論に基づき「民族あつての国王」という論理構成をとっているのである。

②仏教的人間国王、ヒンドゥー教の神、および民間信仰の神霊としての国王像 — 国民の信託を得た有徳な指導者と神格化され崇拜される救済者

ワチラーウット王、プラチャーティボック王(ラーマ7世、在位1925-1935)に大臣などとして仕え、プーミボン現国王(ラーマ9世、在位1946-)には摂政、枢密院議長として仕えたターニー親王は、国王の即位戴冠式などに見られるヒンドゥー教的要素(例えば降臨したシヴァ神と国王が一体化することで初めて正統な王と見なされる)は単なる外面的な装飾に過ぎず、タイの国王制は古来からの「父親としての国王」像が仏教的国王論(国王は会衆が選出したthe Great Elect, 仏教上の国王の十の徳と戒律に律せられる存在)によって洗練されたものを根本としていると説明した。現国王も自らの地位は国民次第であり、国民が欲しなければいつでも退位する用意があると語ったことがある。92年憲法で変更が加えられるまで、王位継承は国会の承認事項であった。

エリートによる王権の仏教的合理的説明にもかかわらず、神格化され崇拜される国王像も強固に存在している。今日でも高僧が国王を讃えた「国王は神の化身に等しい高貴な存在であるにもかかわらず、下々の人民の救済のために苦難を厭わない」という説教を国営放送で耳にする。1932年立憲革命後にプラチャーティボック王は、「人民は国王は神であるので、神力で革命勢力を打倒できると傍観している」と書いている。

このようなヴィシヌ神やシヴァ神を思わせるヒンドゥーの神々も含む様々な霊力に、タイ民衆は、現世での救済を求めてすがる信仰をもっている。筆者には、低学歴低所得の大多数のタイ民衆は国王を靈験あたたかな神霊として崇拜してように思われるのである。つまり、タイ人の国王崇拜は民間信仰に基礎があると考えられるのである。全国各地で国王の名による生活改善のための農村開発プロジェクトが実施されているが、これは庶民の国王崇拜に答えたものであろう。

③国王と政治

憲法上国王の行為は副書を要する。この点では他の立憲君主国と異ならない。しかし、現国王はしばしば政変に際して調停者の役割をなし、あるいは政府の政策に提言苦言を呈している。タイの憲法学者はこれを憲法上認められる国王の助言と解説している。助言であるから政府を拘束するものではないが、政府は国民の信頼と崇拜とを得て威光(ハラム)の大きな国王が、国民の必要を代弁して助言した場合、無視することは困難である。

最近ではテレビ、ラジオのニュースの時間に国王が折々に発したお言葉の一部が格言のように放送されている。例えば「多数の間人がいれば必ず善人と悪人がいることは避けられない。善人だけに政治を担当させ、悪人は排除することが肝要である」と言った類である。この言は金権腐敗政治家を排除しようとする近年の政治改革の潮流に沿ったものである。国王は国民世論の主潮流の代弁者の役割を担っているのである。

参考文献、村嶋英治『ピブーン、独立タイ王国の立憲革命』(現代アジアの肖像シリーズ、第9巻)岩波書店、1996年